潮流

雪迎え

鳥取ガス株式会社取締役社長　児嶋　祥悟

独眼竜で有名な伊達政宗の生地、山形県米沢盆地では、「雪迎え」という不思議な現象がみられるという。それは、晩秋の澄んだ青空を白い細い糸、あるいは白い小さな固まりが、ひっきりなしにどこへともなく、静かに流れていく。

「雪迎え」が見られると、まもなく里に雪が降り始める。ここは山々に囲まれた水田地帯で、人々は宗教的感情で、その流れて行く白いものを仰いでは、冬支度を急ぐ。

「雪迎え」は、小さなクモが空中移動するためのクモの糸なのである。クモは空中へ糸を流し、種の繁栄と保身のために、風を頼りにその糸に乗り、大空へ飛び立つのである。クモから流れる細い糸は、微妙な風の動きに軽やかになびく。クモは枯れ草の先から確信を持って、空中にその身を舞い上げる。そして、自分の吐（は）いた糸に乗り、空中を浮遊し、上昇気流にその身をゆだねる。「雪迎え」の正体は、クモの空中移動、飛行現象なのである。

厳しい冬を迎える農村の人々は、おそらく本能的に、その「白いもの」の先に、希望に満ちた世界があると信じていたのだろう。そう信じることで、冬の厳しさに耐え、その自然の神秘的な情景を「雪迎え」と、畏（い）敬の念をこめて呼んだのであろう。

わが国の将来も、いままさに「雪迎え」と同じではなかろうか。

東京大学名誉教授・木村尚三郎氏は、「経済大国と称して、繁栄を謳歌している日本は、すでに、ローマ帝国や大英帝国にみられた衰退の兆候が現れている」と述べている。

わが国の歴史を振り返ると、島国という地理的条件に幾度となく救われて来たが、国の存亡の危機に直面した経験は、唯一敗戦の時だけである。その敗戦すら、中国、朝鮮半島、東南アジア諸国と比較すると、恵まれた支配を受け、奇跡に近い復興を成しとげた。敗戦という、経験したことのない境遇からの一日も早い立ち直りと、欧米に比肩する生活水準をひたすら願い、今日の日本を築きあげてきた。

しかし戦後五十年、繁栄のつけは政治、経済、社会、教育、外交の諸問題に根深く巣喰（く）い、地殻変動をおこしている。「飢え」を、そして敗戦を知らない世代が年々増加し、将来に対する危機感の欠如や問題認識の甘さは目をおおうばかりである。

われわれは文明社会に首までどっぷりつかり、欲望を無限に求めるだけの国民になり下がったのだろうか。

岡倉天心は、「われわれの歴史の中に、われわれの未来の秘密が横たわっている」と言っている。謙虚に歴史に学ぶ姿勢と、未来に対して、常に問題意識を持ち続けることが重要と思われる。

「雪迎え」の土地の人々のように、未来に生きようとする若者は、厳しい冬に耐えうる工夫と覚悟を知ってほしいものだ。小さなクモが確かな風を注意深く選び、新しい天地を求めて飛行するように、私たちも大志を抱いて大空へ羽ばたきたいと思うのである。

（鳥取市）